

●グローバル化時代の医療・検査事情 44

世界の医学部を巡って (21)
V 追加 ヨーロッパ編 イタリア

な ら のぶ お
奈 良 信 雄
Nobuo NARA

世界の医学教育を調査研究するプロジェクトを担当していた 2008 年当時、歴史と伝統のあるイタリアでどのような医学教育が行われているのか、視察調査しようと考えた。そこで、ローマにある日本大使館に訪問を打診したが、どうしても調整できなかった。

やむなくイタリア出張を断念していたところ、2014 年にヨーロッパ医学教育会議 (Association for Medical Education in Europe: AMEE) がミラノで開催されることになった。AMEE では「医学教育評価」がテーマの一つで、当時僕が中心となって設置を検討していた日本医学教育評価機構 (JACME) について紹介するよう、世界医学教育連盟 (WFME) 会長から要請された。この機会を逃す手はなく、万難を排してイタリアに向かった。

イタリア共和国 (通称イタリア) は 20 州からなり、日本の約 5 分の 4 に当たる 30.1 万平方キロの国土に約 6,046 万 2 千人が住んでいる¹⁾。首都はローマにあり、主要言語としてイタリア語が使用されている。宗教は、国民の約 80% がキリスト教徒 (カトリック) で、そのほか、キリスト教 (プロテスタント)、ユダヤ教、イスラム教、仏教などである。

歴史的にみれば、紀元前 600 年頃にローマが建国されたとされる。その後ローマは支配領域を次第に拡大し、紀元前 300 年頃にはローマ市の人口は約 10 万人になったという。紀元前 27 年にはアウグストゥスが皇帝となって共和政から帝政に移行し、ローマ帝国が誕生した。この時代にはローマ市は約 100 万人にもなったとされる。当初は共和政的要素も残って元首政が執られていたが、紀元 2 世紀の五

賢帝の時代には政治が安定して領土も最大になった。

しかし、その後は軍人皇帝時代における混乱、ゲルマン人やササン朝の侵入などによって次第に衰えるようになり、専制君主政に移行して 395 年には東西に分裂するに至った。

その間、キリスト教が帝国内に浸透するようになった。当初は厳しく弾圧されていたが、次第に信者が増え、313 年には公認された。ローマはキリスト教文化の中心となり、ローマ法王が権威を確立した。

「ローマ帝国」は実質的には 395 年に東西分裂したが、形式的には 1453 年のビザンツ帝国滅亡まで存続したことになっている。ローマ帝国の支配は全地中海領域に及び、最盛期には北は現在のイングランドとウェールズを含む大ブリテン島に置かれたブリタニア、大陸ではライン川からドナウ川を結ぶ線の内側にあった属州ガリア、南はエジプトとアフリカ北岸、東はメソポタミア、西はイベリア半島にも及んでいた。

近代のイタリアは、1861 年にヴィットーリオ・エマヌエーレ II 世によるイタリア王国の建設に遡る。建国時の首都はトリノであったが、1864 年にフィレンツェに、そして 1870 年にローマに遷都された。

1922 年にはファシスト党ムッソリーニが政権を掌握したが、第二次世界大戦の敗戦とともにムッソリーニ政権は 1943 年に崩壊した。1946 年には国民投票によって王制が廃止され、1948 年に共和国憲法が施行され、現在に至っている¹⁾。

I. 医療制度

人口1,000人当たりの病床数は3.160床（日本は12.840床²⁾、医師数は4.0人（日本は2.49人）である。ただし、イタリアの医師は高齢化が進んでおり、半数が55歳以上とされる。このため、後述するように医学部数を増やして医師の養成が推進され、医学部卒業生は人口10万人当たり17.560人（日本は6.990人）になっている。国民の平均年齢は45.2歳で、平均寿命は男性が81.1歳、女性が85.4歳と、長寿国である。

イタリアには日本の国民健康保険制度と同じように、Servizio Sanitario Nazionale (SSN) が1978年から導入され、救急医療や家庭医療などは無料で受けられる。

健康を害した場合、かかりつけ医としてのホームドクターを最初に受診し、高度な医療や精密な検査等が必要な場合には専門医を紹介されるシステムになっている³⁾。

病院には、公立と私立がある。公立病院では保険診療を受けられ、費用負担が少ない。しかし、いつも混雑しており、緊急性のない患者は待ち時間が長く、手続きも煩雑とされる。一方、私立病院は、比較的早く予約が取れ、待ち時間もさほどかからない。もっとも、その分、診療にかかる費用は高額になる。

II. 教育制度

イタリアでは小学校から高校までが義務教育である⁴⁾。小学校入学までは幼稚園に通うのが一般的で、小学校は5年間（6～11歳）、中学校は3年間（11～14歳）、高校は5年間（14～19歳）の教育制度になっている。

高校には大きく分けて3種類あり、大学進学を目指す普通科公立高校、商業・工業・農業などの専門分野を学ぶ技術学校、さらに調理・ビジネス・旅行業・美容などの専門分野を学ぶ職業学校がある。高校の最初の2年間では一般教養を身に付け、残りの3年間で専門分野を選択して学ぶ。高校を卒業する際には、マトゥリタと呼ばれる卒業試験を受ける必要がある。

大学には、3年間の学士課程、2年間の修士課程、

5～6年間の専門課程があり、医学や歯学の教育期間は日本と同様に6年間である。ヨーロッパ最古のボローニャ大学や2番目のパドヴァ大学を始め、大学は96校あるが、その約75%は公立である。いずれも政府の援助を受けて運営され、学費は低額に抑えられている。2022年のQS世界大学ランキングによれば、ミラノ工科大学が世界142位、ボローニャ大学が第166位、ローマ大学が第171位になっている⁵⁾。

大学卒業後は大学院に進むことができる。ユニークなものとして、エリートを育成するためにナポレオンが1810年に創設した特権階級養成学校のScuola Normale Superiore di Pisaがあり、ごく少数の優秀な学生を対象に教育が行われている⁶⁾。その他にも、専門分野に特化した、音楽院、芸術院、舞踏院などがある。

高等教育はボローニャプロセス⁷⁾を導入しており、履修単位として欧州連合(EU)に共通した欧州単位互換制度(European Credit Transfer System: ECTS)単位⁸⁾を用いたヨーロッパ高等教育質保証連盟(European Association for Quality Assurance in Higher Education: ENQA)⁹⁾の制度に基づいて教育が行われている。

III. 医学部教育

医学部は2001年当時43校あり、入学定員は7,533名であった。しかし、医師不足が指摘され、それを解消するため、2021年現在では医学部は61校、入学定員12,266名に増えている¹⁰⁾。医学部数と学生数の増加に伴い、教育を担当する教員の確保が問題になるが、学生/教員数は27.4 ± 0.7に保たれるように教員が安定して供給されている¹¹⁾。

①入学制度

1999年に医学部定員制の仕組みが導入された。公立大学に入学するには、保健省が管轄する委員会が実施する入学試験に合格する必要がある。私立医学部では独自の入学試験が行われるが、入学定員は規制されている。

2013/2014年度から入学者選抜にユニークな全国ランキング試験が導入され、論理的思考と知識の評価に重点が置かれ、論理と一般教養、生物学、化学、数学、物理学に関する60問の多肢選択問題が出題

されている。もっとも、近年では医学部進学志願者が増加の一途をたどり、高校で医師になる適性を考慮した進路相談を強化するように求められている。対策の一環として、ローマ大学ローマ・ラ・サピエンツァ校では、「Get to Know Yourself」というセルフ・アセスメント質問票を提供し、今日までおよそ3万人の高校生が利用している¹²⁾。質問票には、自立心、情緒バランス、対人関係への準備、動機、リーダーシップ力、社交性など個人の資質や、学問とプロフェッショナルへの志向性などをチェックする項目が含まれており、進路を決定する上での参考になっている。

②カリキュラム、教育法、評価

イタリアの医学部教育は6年間で行われ、基礎科学、前臨床、臨床の3セグメントからなる。ボローニャプロセスに沿い、ENQAの教育質保証に適合するよう、9,000時間のうち少なくとも5,500時間は対面式の講義、シミュレーション教育、臨床実習で構成される。イタリアの医学部で取得した学位はEUで通用する。

最近の20年間で、従来の教員が知識を伝授する教育から、学生を主体にした学修成果基盤型教育に転換している。低学年で基礎医学教育、高学年で臨床医学教育という旧来型の教育システムから、1～2年次では基礎医学教育に臨床医学教育がくさび型に組み入れられ、3年次以降は段階的に臨床に則した実践的な教育として、シミュレーション教育や臨床実習施設での臨床実習へと進行する¹³⁾。もちろん講義や小人数グループ教育は6年間を通して行われる。例として、表1にローマ大学トール・ヴェルガータ校医学部のカリキュラムを示す¹⁴⁾。

臨床実習は、病院や外来診療で行われ、救急医療の体験も重視されている。研究活動の推進や、医学と工学との連携なども教育に含まれている。ただし、多職種間連携教育は十分ではない。

学生の評価は、伝統的な総括試験として、口頭試験、筆記試験、実技試験で主として実施される。卒業では卒業論文(Thesis)の最終口頭発表が行われ、教授からなる委員会審査される。形成的評価の使用は十分とは言えず、臨床推論演習、省察、ポートフォリオなどの導入が検討されている。

臨床技能の評価では、標準模擬患者(Standardized Patients: SPs)や客観的臨床能力評価(Objective

表1 ローマ第2大学トール・ヴェルガータ校医学部カリキュラム

学年	セメスター	履修科目	履修単位(CFU)*
1	1	化学、生化学入門	7
	2	物理学、統計学	12
		科学論文記載	6
	3	人体解剖学I	10
	4	組織学、発生学	9
5	生物学、遺伝学	10	
2		臨床実習I	6
	6	人体解剖学II	5
	7	生化学	14
	8	生理学	18
	9	免疫学、免疫病理学	7
3	10	微生物学	10
		臨床実習II	3
	11	臨床症候学	6
	12	臨床検査学	10
	13	病理学総論、病態生理学	14
4	14	人間科学	6
	15	病理学各論I	8
	16	臨床実習III	11
	17	解剖病理学	11
	18	公衆衛生学	6
5	19	薬理学	10
	20	病理学各論II	12
	21	病理学各論III	8
		臨床実習IV	12
	22	画像診断学、放射線治療学	5
6	23	整形外科	6
	24	神経学	5
	25	精神神経学	5
	26	産科学、婦人科学	4
	27	小児科学	6
7	28	選択科目	8
		臨床実習V	9
	29	内科学、臨床遺伝学	15
	30	外科総論	9
	31	専門科目	6
8	32	法医学	4
	33	皮膚科学、形成外科学	3
	34	救急医学	7
	35	臨床実習VI	14
	36	卒業論文作成	5
		総合診療	5
合計単位			360

*CFU: The European Credit Transfer and Accumulation System(ECTS) credits

Structured Clinical Examination: OSCE)の活用も進められ、Millerのピラミッドに沿って、Knows(知識)、Knows How(手技)、Shows How(演習)、Does(実践)、IS(確定)の順で技能の修得とその達成の評価が行われている¹⁵⁾。

医学部教育は国家組織であるThe Permanent Conference of Directors of Medical Curriculaによって統轄され、同カンファレンスは国家的なコア・カリキュラムの策定¹⁶⁾と、全国レベルでのプログレ

ス試験¹⁷⁾を2006年以降導入している。

IV. 卒後教育

医師国家試験に合格すれば医師になれる。学位取得後、医師は専門分野のあらゆるレジデンシー・プログラムに直接アクセスできる。卒後医学教育には、50の専門分野があり、1,000以上の認定施設があって、各プログラムは3～6年続く。

生涯教育として、1999年にすべての医療従事者に対する継続教育が法律によって義務付けられている。医師、および約50の異なる医療専門職の医療従事者は、毎年50時間のトレーニングに相当する50単位を取得しなければならない。

V. イタリア紀行

イタリアと聞いて思い浮かべることは数多いと思う。ローマ帝国、世界遺産、絵画、彫刻、オペラ、料理、ワイン、ファッション、サッカー等々…。魅力満載のイタリアは、一度は訪れてみたい国の代表の1つに違いない。

ヨーロッパ医学教育会議に参加するためにミラノを訪れた(写真1)。会場はさすがにイタリアのデザインセンスが発揮されていた。会期中は、世界医学教育連盟会長、アメリカ ECFMG (外国医師卒後教育委員会) 会長、LCME (アメリカ医学教育連絡委員会) 代表、FAIMER (国際医学教育研究振興財団) 代表、NBME (アメリカ医師国家試験委員会) 会長ら、医学教育分野別評価の確立に重要な役目を担うメンバーらと会った。そして、JACME が医学教育

分野別評価組織として国際的に認定されるべく、ありったけの英語を駆使して JACME の現状を説明し、意見を交換した。ディナーにも招待され、酒杯を交わすこともできた。もともと、決して嫌いではないワインを控え、酔いはほどほどにして、いろいろな国の訛りがある英語を聞き逃さないように注力せざるを得なかった。

感触は、もちろん、上々だった。(僕の姓である Nara は日本最古の都に因み、名の Nobu はニューヨークの高級レストラン Nobu と同じだと説明すれば、外国人にすぐに覚えてもらえた。名前得か?)。

学会の合間を縫い、ミラノの文化を楽しむこととした。ミラノ市内には路面電車が縦横に走り、散策にはすこぶる便利だった。

まずは、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」が飾られているサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会へ電車で出かけた。教会自体はミラノ・ルネッサンス様式とは言うものの、大した見栄えはしない(写真2)。が、教会には長蛇の列ができていた。世界の誰もが知っている超有名な絵画は、教会の台所の壁に直接にテンペラと油彩の混合技法で描かれている(これぞ正しく壁画!!)。火災の危機を乗り越えて、修復を繰り返されつつも、今日まで残っているとか。

予約しておいたので時間を節約できたが、予約がなければ相当長く待たされたに違いあるまい。画集の絵を見ただけだと分からなかったが、実はキリストの足下には台所の出口にあたる半円形の扉がある!。そんな現実を写真撮影して読者にお見せしたかったが、あいにく撮影は厳禁だった。

続いてドゥオーモへ(写真3)。ゴシック建築の巨



写真1 ヨーロッパ医学教育学会 (AMEE) 会場



写真2 レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」があるサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会

大な聖堂の内部はステンドグラスが美しく映える教会。が、それ以上の圧巻といえば、屋根裏ならぬ屋根上。聖堂の裏口にあるエレベータに乗って屋上階へ上がると、市内を一望でき、屋上には135本もの尖塔が天を突き刺すがごとく聳え立ち、壮観だった(写真4)。

ドゥオーモの屋根から降りた後は、踏めば再び訪れることができるとの言い伝えがあるモザイクが地面にあるガッレリアへ。アーチ型ガラス天井のアーケード通りの中央に、雄牛のモザイクが埋め込まれている(写真5)。雄牛の急所に踵をのせ、反時計回りに3回まわると願いが叶うとか。もっとも、モザイクを踏みつけてクルリと3回まわってはみたものの、以来、ミラノに再度行く機会にはさっぱり恵まれない。さては急所を外したか？

ドゥオーモのすぐ近くには、オペラの殿堂であるスカラ座がある(写真6, 7)。あいにくオペラは上演されておらず、博物館を覗くことにした。館内には初演時のアイダやトゥーランドットのポスター、当時使用された衣装、作曲家ヴェルディが使

用したピアノ、マリア・カラスの肖像画などが所狭しと陳列されており、見応えは十分にあった。

また、ほど近い場所に1466年に完成したというスフォルツァ城がある(写真8)。レオナルド・ダ・ヴィンチも建築に加わったとされ、場内には博物館や美術館もある。裏手には広大なセンピオーネ公園があり、新古典様式の凱旋門が威風堂々と立っている(写真9)。1807年にナポレオンに捧げるために



写真5 ガッレリアの雄牛のモザイク



写真3 ミラノのシンボル「ドゥオーモ」



写真6 スカラ座



写真4 ドゥオーモの屋根の上



写真7 スカラ座劇場

建設されたが、彼の失脚後はオーストリア皇帝、さらに1859年にはイタリア独立に献納され、碑文も独立を讃えるものに変えられて「平和の門」となっている。栄枯盛衰は世の常なのだろう。

さて、イタリア旅行で見逃せないのが、「アドリア海の女王」と称されたヴェネツィアだろう。ミラノからは電車でサンタ・ルチア駅に向かった。そこからはヴァポレットという水上乗り合いバスで島巡り(写真10)。

いつか観た日本のテレビ番組で海水に沈没する危機に瀕していると報道されていたが、現地に行くと何のことはない。汐の満ち引きで、路面が海水に浸るのは当たり前。現地の人にはさほど気にしていないようだった。(とは言うものの、2018年秋には集中豪雨でサンマルコ広場が水浸しになり、犠牲者も出る被害が出た)。

リアルト橋、サンマルコ広場などの見所を、大勢の観光客に混じって散策した(写真11, 12)。土産にはムラーノ島のガラス工芸品、仮装カーニバルで

有名な仮面をゲット。残念ながら時間がなく、ゴンドラには乗り損ねた(写真13)。

折角のミラノ。雄牛モザイクの御利益は当てにできず、電車で近郊に出向いた。ミラノ中央駅からは約50分ほどで、中世の趣が残る世界遺産に登録されているロンバルディア州のベルガモへ。石畳と石壁に囲まれた旧市街を歩くと、ロンバルディア・ルネサンスの傑作ともされるコッレオーニ礼拝堂に着



写真10 ヴェネツィア



写真8 スフォルツァ城



写真11 カナル グランデ(大運河)に架けられたリアルト橋



写真9 平和の門(センピオーネ公園)



写真12 サンマルコ広場

く(写真 14, 15)。大理石のはめ込み模様と彫刻が正面を飾り、内部にはディエポロのフレスコ画に出会える。名物菓子というポレンタ・エ・オゼイの販売店にも立ち寄り、土産を買った(写真 16)

また、ロンバルディア州には北イタリアの湖水地方として美しいコモ湖がある。アルプスの南山麓にあり、長さ約 50km、最大幅 4.4km の湖で、深いところは 410m もありヨーロッパ最深とされる。避暑



写真 13 カナル グランデを行き交うゴンドラ



写真 14 ベルガモ市内散策

地として古来からローマ皇帝、ヨーロッパ王室、富裕層に愛され、遊覧船で湖を巡ると、高級別荘が次々に現れる(写真 17)。

さらに足を伸ばして、隣国スイスにあるサン・モリッツに出かけることとし、ミラノ中央駅から列車に乗り込んだ。2等車ではあったが、座席はヨーロッパ人仕様のためユッタリし、日本のグリーン席よりもむしろ快適だ。ミラノの北にあるコリコで乗り換えた。

だが、ここで冷や汗びっしょり。情報では1番線でキアベンナ行き電車に乗り換えることになっていた。駅構内の電光掲示板を念のために確認したが、1番線との表示。ボーッと生きて、いや、待っていたところ、起点駅にもかかわらず、一向にそれらしき列車が入線してこない。いぶかしく思っていると、線路を挟んだ2番線に可愛い3両編成の列車がゆるゆると入線してきた。見れば、リュックを背負った、登山客らしき数名が次々に乗り込んでいくではないか。

もしや2番線の電車こそが、目的の電車ではない



写真 16 ベルガモ名物菓子
ポレンタ・エ・オゼイの販売店



写真 15 ベルガモ・アルタにあるコッレオーニ礼拝堂



写真 17 コモ湖

か？不安が脳裏を横切った。「線路を横切るべからず!」。こんな看板を無視して線路を横切り、最後尾の車両に乗っている女性車掌に尋ねた。「そうよ、キアベンナ行きよ」と来た。日本なら電車を止める大騒動になるであろう不法行為を無視しつつ、平然たる答え。

列車は定刻に発車し、コモ湖、マジヨーレ湖、切り立つ山々を抜けてアルプスの麓にあるキアベンナに到着した。キアベンナからはポストバスでサン・モリッツに向かうことにした。

バスの出発までは余裕があり、駅前のカフェでジェラートを食べながら待っていると、黄色の車体のポストバスがやって来た。郵便配達よろしく、村々の停留所で登山客を乗降させながら、サン・モリッツを目指した。登山客の配達が任務だからポストバスというのだろうか？

くねくねした山道だが、道は整備され、バス旅行も快適そのもの。最初は少なかった乗客も、停留所に着くたびに登山客が乗り込み、ほぼ満席。バスは徐々に高地を走り、サン・モリッツ駅に着いた。

サン・モリッツは、シャンパン気候と謳われ、1年中新鮮な空気と抜けるような青空…の、はず。が、あいにくの曇天。時折小雨がぱらつく。それでもアルプスを望むサン・モリッツ湖は清楚で、いかにもスイスを表現していた。

オードリー・ヘップバーンが好んだという地方名物菓子の「エンガディナー・ヌストルテ」が有名な彼女行きつけのハンゼルマンという店を探した。初めての町で、地図がよく分からない。地元女性なら知っているだろうと、犬を散歩させていた金髪女性

に聞いた。意外にも「知らないわ、あちらの店で聞いてみては」と素気ない返事。やむなく自力で探したら、煉瓦色の建物が目に入った(写真18)。

昼過ぎで混んではいたものの、窓際の席が運良く空いた。寒かったので、温かな特製スープ、野菜サラダ、サラミサンドウィッチを頼んだ。サン・モリッツの山々、湖を眺めながらでの食事は格別(写真19)。デザートは、もちろん、「エンガディナー・ヌストルテ」(写真20)。

食後にサン・モリッツ駅に戻り、ベルニナ急行に乗り込んでミラノに戻ることにした。駅のホームには、青地に St. Moritz と書かれた質素な白文字看板。ところが、その横に、すんなり読めるデッカイ木製看板が。それもそのはず、日本語で「サン・モリッツ」と書かれているではないか!! 箱根登山鉄道とアルプス鉄道が姉妹関係にあり、日本人を歓迎しているようだった(写真21)。

アルプス鉄道は赤い車体で、天井まで届く大きなガラス窓。パノラマ列車からの見晴らしは抜群。雄



写真19 アルプスを望むサン・モリッツ湖



写真18 オードリー・ヘップバーンが通ったカフェ・ハンゼルマン



写真20 オードリー・ヘップバーンの愛したというエンガディナー・ヌストルテ



写真 21 サン・モリッツ駅



写真 23 多彩なパスタ料理

写真 22 ベルニナ鉄道でサン・モリッツから
ティラノへ向かう

写真 24 パスタ専門店

大なモルテラッチ氷河、美しい森や滝、4,000m級の山々が連なるベルニナ・アルプスなど、飽きることがない。天候は相変わらずイマイチで、曇天。氷河は霧に覆われ、わずかな瞬間に覗けたのみ。湖も、霧の中。幻想かしらと思わせる世界を、ゆるゆると列車が進んだ。

標高 2,253 m のベルニナ峠を越え、約 1,800 m の高低差をアップダウンしながら列車は進んだ。「世界一ノロマな急行」と駅に書かれていたが、これだけの標高差ならゆっくりで十分。景色も堪能できる。夏にもかかわらず白い雪をわずかながらも頂くアルプス山脈を眺めながら、360度ループ橋を悠々と渡った(写真 22)。もっとも、ループ橋は外から見ると景観だが、電車の中からだと、からっきし高さを感じなかった。

やがてパノラマ列車は終点の国境の町ティアラに到着。ここで電車を乗り換え、ミラノ中央駅に戻った。歩いてホテルに戻った途端、一天俄にかき曇って雷鳴が轟き、ザーッと大雨。普段の行いの良さを、

いみじくもお天道様が証明してくれた(?)。

さて、学問、外交、芸術、世界遺産見学に励んだ後は、もちろんイタリア料理。滞在期間中、毎日、片っ端から色々なパスタに挑戦した。飽きることなく、地元のパスタ料理を楽しめた(写真 23)。それでもあまりの種類が多さに食べきれず、土産にとパスタ専門店を覗いた。パスタ専門店にも多彩なパスタが売られており、どれをお土産に買って帰るべきか、悩まずにはいられなかった(写真 24)。

文 献

- 1) 外務省資料
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/italy/index.html>
アクセス 2021.12.20
- 2) OECD データ
<https://data.oecd.org/health.html> アクセス 2021.12.20
- 3) <https://www.ladovina.net/italiainfo/medico.html> アクセス 2021.12.20
- 4) <https://anokuni.com/educational-system/ita/> アクセス 2021.12.20

- 5) 大学ランキング
<https://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2022> アクセス2021.12.20
- 6) <https://www.sns.it/en> アクセス2021.12.20
- 7) Patricio M, Harden RM.: The Bologna Process - a global vision for the future of medical education. *Med Teach.* **32** (4): 305-315, 2010
- 8) https://ec.europa.eu/education/resources-and-tools/european-credit-transfer-and-accumulation-system-ects_en アクセス2021.12.20
- 9) European Association for Quality Assurance in Higher Education. 2021. <https://enqa.eu/> アクセス2021.12.20
- 10) Medical education in Italy: Challenges and opportunities Fabrizio ConsortiORCID Icon, Giuseppe Familiari, Antonella Lotti & Dario TorreORCID Icon Published online: 08 Aug 2021
<https://doi.org/10.1080/0142159X.2021.1959024>
- 11) <https://ava.miur.it> アクセス2021.12.20
- 12) <https://www.uniroma1.it/en/pagina/student-orientation> アクセス2021.12.20
- 13) Snelgrove H, Familiari G, Gallo P, et al.: The Challenge of reform: 10 years of curricula change in Italian medical schools. *Med Teach.* **31** (12): 1047-1055, 2009
- 14) <https://en.uniroma2.it/> アクセス2021.12.20
- 15) Cruess RL, Cruess SR, Steinert Y.: Amending Miller's pyramid to include professional identity formation. *Acad Med.* **91** (2): 180-185, 2016.
- 16) Della Rocca C, Basili S, Caiaffa MF, et al.: Core Curriculum dei Corsi di Laurea Magistrale in proposte e Chirurgia Editing, razionalizzazione, semplificazione e proposte di evolution proposals [The core curriculum of the master's degree courses in medicine and surgery: Editing, rationalization, simplification and revolution proposals.] *J Ital Med Educ.* **73**: 3315-3321, 2017.
- 17) Recchia L, Moncharmont B.: Dal Progress Test al Training Test: analisi dei risultanti finali [From the progress test to the training test: analysis of final results.] *J Ital Med Educ.* **82**: 3650-3654, 2019.